

ヘーゲル『論理学』初版（1812年）396段落～400段落

段落	文	頁	行	原文	神山訳	寺沢訳
		136	9	Anmerkung 1.	註解 一	注解〔スピノザの量の概念〕
396	1		10 11 12 13 14 15	Die reine Quantität hat noch keine Grenze, oder ist noch nicht Quantum; -- auch insofern sie Quantum wird, wird sie durch die Grenze nicht beschränkt, denn sie besteht eben darin, durch die Grenze nicht beschränkt zu seyn, das Fürsichseyn als ein aufgehobenes in sich zu haben.	純粋な量は、まだ限界を持っていない、いいかえれば、まだ数量ではない。——純粋な量が数量になる場合であっても、純粋な量は、限界によって制限されない。というのも、純粋な量の実質は、まさに、限界によって制限されていない点にあり、〈それだけで独立していること〉を〈廃棄されたもの〉としてみずからの内に持っている点にあるからである。	純粋量はまだどのような限界をももっていない、換言すれば、それはまだ定量ではない。——それが定量になっている場合でもまた、量は限界によって制限されていない、というのは、量はまさに、限界によって制限されておらず・向自存在を揚棄されたものとして自己のうちにもっていることをその本質としているからである。
	2		15 16 17 18 19	Daß sie die aufgehobene Discretion ist, kann auch so ausgedrückt werden, daß die Quantität schlecht- hin in ihr allenthalben die <i>reale Möglichkeit</i> des Eins ist, aber umgekehrt, daß das Eins eben so schlecht- hin nur als continuirliches ist.	純粋な量が《分離が廃棄されたもの》であるということは、次のようにも表現することができる。すなわち、《量は、端的にそのいたるところで、〈一つ〉の【実在的な可能態】である》のだが、逆転して、《〈一つ〉は、端的にただ〈連続的なもの〉としてのみある》というように。	量が揚棄された離散性であるということは、量はそのなかのいたるところで端的に一の実在的可能性であるが、しかし逆に、一はまたまさに端的にただ連続的なものとしてだけある、というようにも表現されることができる。
397	1		20 21 22 23 24	Der begrifflosen <i>Vorstellung</i> wird die Continui- tät leicht zur <i>Zusammensetzung</i> , nemlich einer <i>äusserlichen</i> Beziehung der Eins aufeinander, worin das Eins in seiner absoluten Sprödigkeit und Ausschlies- sung erhalten bleibt.	概念を欠いた【表象】にとつては、連続態は、いとも簡単に、〈一つ〉を〈【並べて置くこと】〉になってしまう。すなわち、〈一つ〉が相互に【外面的に】〈関係すること〉になってしまう。このように関係するさいに、〈一つ〉は、その絶対的な冷淡さをもって排除することによって、維持されたままである。	概念の欠如している表象にとつては、連続性はもろもろの一の合成と・すなわちそのなかで一がその絶対的なとりつきにくさと排除とのうちに保持されつづけているところのもろもろの一の外的な相互関係とされやすい。
	2		24 25 26 27 28	Es hat sich aber am Eins gezeigt, daß es an und für sich selbst, in die Attraction, in seine Idealität übergeht, und daß daher die Continuität ihm nicht äusserlich ist, sondern ihm selbst angehört, und in seinem Wesen gegründet ist.	しかし、〈一つ〉のもとの明瞭になったのは、次のことであった。すなわち、《〈一つ〉は、〈それ自体でもそれだけでそれ自身独立しても〉、牽引に移行し、みずからの観念態に移行する》ということであり、したがって、《連続態は、〈一つ〉にとって外面的であるのではなく、むしろ〈一つ〉それ自身に密接に結びつき、〈一つ〉の本質に根拠づけられている》ということである。	しかし、一は絶対的かつ究極的に牽引へ・すなわちその観念性へと移行し、したがって連続性は一にとって外的ではなく、一そのものに属し、一の本質のうちにその根拠をもっている、ということが一について示されたのである。
	3		28 29 30 32 32	Diese <i>Äusserlichkeit</i> der Continuität für die Eins ist es überhaupt, an der die Atomistik hängen bleibt, und die zu verlassen und in den Begriff, in das Innre zu gehen, die Schwierigkeit für das Vorstellen macht.	〈一つ〉にとって連続態がこのように〈【外面的であること】〉は、一般に、原子論がこだわり続けるものであって、このように〈外面的であること〉から離れて概念に——〈内的なもの〉に——入り込んで行くことは、〈表象すること〉にとつ	もろもろの一にとつての連続性のこの外面性は、一般に原子論がすがりつきつづけているところのものであり、この外面性をすてて概念へ・内的なものへと進むことは表象作用にとつては困難なことである。

ヘーゲル『論理学』初版（1812 年）396 段落～400 段落

					て〈困難であること〉になる。	
398	1	137	1 Den Begriff der reinen Quantität gegen die bloße 2 Vorstellung hat <i>Spinoza</i> , dem es vorzüglich auf den- 3 selben ankam, im Sinne, indem er (Eth. P. 1. Prop. 4 XV. Schol.) auf folgende Weise von der Quantität 5 spricht: 6 Quantitas duobus modis à nobis concipitur, ab- 7 stracte scilicet sive superficialiter, prout nempe ipsam 8 imaginamur; vel ut substantia, quod a solo intellectu fit.	【スピノザ】は、たんなる表象に対抗する純粋な量の概念を持っていた。スピノザにとっては、おもに概念が問題となる。というのも、スピノザは、『エティカ』第一部定理十五備考において、次のように量について語っているからである。 「我々は量を二様の仕方で考える。一は抽象的にあるいは皮相的にであり、これは量を〈普通に〉表象する場合である。他は量を実体として考える場合であり、これは単に知性のみによって〈表象の助けを借りずに〉行われる。	スピノザは概念をとりわけ重要視したが、そのスピノザは、量についてつぎのように語る（『エティカ』第一部、定理一五、備考）場合に、たんなる表象に対立する純粋量の概念を念頭においていた。すなわち、 「量はわれわれによって二様の仕方で考えられる、すなわち一方は抽象的にまたは表面的にであって、これは量を表象する場合であり、他方は実体としてであって、これはただ知性のみによっておこなわれる。	
		2	9 Si itaque ad quantitatem attendimus, prout in imaginatione est, quod saepe et facilius à nobis fit, reperietur finita, <i>divisibilis et ex partibus conflata</i> , si autem ad ipsam, prout in intellectu est, attendimus, et eam, quatenus substantia est, concipimus, quod difficile fit, -- <i>infinita, unica et indivisibilis reperietur</i> .	ゆえにもし我々が表象においてあるままの量に心を留める（これはしばしばそしてより容易に我々のするところだが）なら、量は有限で可分的で部分から或るものとして現れるであろう。これに反してもし知性においてあるままの量に心を留め、そしてこれを実体である限りにおいて考える（これは極めて困難なことだが）なら、それは、我々がすでに十分示したように、無限で唯一で不可分なものとして現れるであろう。	だからもしわれわれが、これはしばしばそしてより容易にわれわれがやることであるが、表象のうちにあるがままの量を心にとどめるならば、量は有限で・可分的で・部分からなるものとして現れるであろう。これに反してもしもわれわれが、これはきわめて困難なことではあるが、知性のうちにあるがままの量を心にとどめて、そしてそれが実体であるその限りでそれを考えるならば、……量は無限・唯一で・不可分なものとして現れるであろう。	
		3	15 Quod omnibus, qui unter imaginationem et intellectum distinguere sciverint, satis manifestum erit.	このことは表象と知性とを区別することを知っているすべての人に十分明白であろう。」 ¹	このことは表象と知性とを区別することを知っているすべての人びとにとって十分に明白であるだろう。」	
399	1		17 Bestimmtere Beyspiele der reinen Quantität, wenn man deren verlangt, hat man an Raum und Zeit, auch der Materie überhaupt, Licht u. s. f. selbst Ich; nur ist, wie schon bemerkt, darunter nicht das Quantum oder Größe überhaupt, insofern diese zunächst an das Quantum erinnert, zu verstehen.	純粋な量のより明確な（規定された）例を求めるなら、空間と時間にその例があり、一般に光などの質料にもそれがあって、〈わたし〉さえもがそうだと思われている。ただし、すでにコメントしたように、純粋な量が数量——あるいは〈大きさ〉がさしあたり数量を想起させるかぎりでは一般に〈大きさ〉——だと悟性的に理解してはならない。	純粋量のいっそうはっきりとした実例は、もしもそういったものがほしいのならば、空間と時間が・または物質一般・光等々もが・そして自我ですらそれがそれである。ただ、すでに注意したように、純粋量という場合に、定量を、あるいは大きさ〔という表現〕がさしあたり定量を思いださせる限りでは、大きさ一般を理解してはならない。	
		2	22 Raum, Zeit u. s. f. sind Ausdehnungen, Vielheiten, die ein Ausser-sich-gehen, ein Strömen sind, das aber nicht ins Entgegengesetzte,	空間や時間などは、広がり（延長）であり、多態である。この広がり、多態は、〈みずからの外に出て行くこと〉であり、〈流れること〉である。	空間・時間等々は、自己の外に出る運動・流れる運動であるところの広がり・数多性である。ただしこの運動は、反対のものへ・すなわち質または	

¹ スピノザ『エチカ』畠中尚志訳、岩波文庫、一九七五年（改版、初版一九五一年）、上、五八頁）による。

ヘーゲル『論理学』初版（1812 年）396 段落～400 段落

			25 in die Qualität oder in das Eins übergeht, sondern als 26 Ausersichkommen ein perennirendes <i>Selbstproduciren</i> 27 sind.	しかし、〈みずからの外に出て行くこと〉、〈流れること〉は、対立したものに、つまり質に移行するのでも、〈一つ〉に移行するのでもなく、むしろ、〈みずからの外に出て来ること〉なのだから、しじゅう【自己産出するもの】である。	一へと移行するのではなく、自己の外に出る運動として反復しておこなわれる自己産出活動である。
	3		27 Der Raum ist diß absolute <i>Ausersichseyn</i> , 28 das eben so sehr schlechthin ununterbrochen, ein Anders- 29 und Wieder-Andersseyn, das identisch mit sich ist; die 30 Zeit ein absolutes <i>Ausersichkommen</i> , ein Zunichter- 31 werden, das stätig wieder das Zunichtwerden dieses 32 Vergehens ist; so daß diß sich Erzeugen des Nichtseyns 33 eben so sehr einfache Gleichheit und Identität mit sich ist.	空間は、こうした絶対的に〈【みずからの外にあること】〉であるが、同じ程度に端的に中断しない〈みずからの外にあること〉であって、〈他であること、しかもふたたび他であること〉であるが、みずからと同一な〈他であること、しかもふたたび他であること〉である。時間は、絶対的な〈【みずからの外に出て来ること】〉であり、〈減ぼすこと〉であって、ふたたびこうした消滅を連続して〈減ぼすこと〉でもある。したがって、〈あらざること（非存在）〉がみずから産出することは、同じ程度にみずからとの単純な同等態であり同一態である。	空間はこの絶対的な自己外存在であり、それは同様にまた端的に中断されない存在であり、他在ありながら自己と同一でありしかもふたたび他在である〔という運動を反復する存在である〕。時間は絶対的な自己の外にでる運動無に帰する運動であって、それはこの消滅をたえずふたたび無に帰する運動である。その結果、非存在のこの自己産出活動は同様にまた自己との単一な相等性および同一性である。
400	1	138	1 Was die <i>Materie</i> als Quantität betrifft, so be- 2 findet sich unter den <i>sieben Propositionen</i> , die 3 von der ersten Dissertation <i>Leibnitzens</i> aufbewahrt 4 sind, (I. Seite des I. Th. seiner Werke) eine hierüber, 5 die zweyte, die so lautet: Non omnino improbabile est, 6 materiam et quantitatem esse realiter idem.	量としての【質料】に関しては、【ライプニッツ】の最初の学術論文で記されている【七つの命題】（ライプニッツ著作集〔第二巻〕第一部最終頁）のうちに、これに関する命題である第二命題が見出される。この第二命題は、次のようになっている。「質料的な存在と量的な存在が実在的に同一であることは、不可能なことではない。」 ²	量としての物質に関しては、ライプニッツの最初の学位論文によって保存されている七つの命題（彼の著作集の第一部の最後のページ）のうちにこのことに関して述べている第二の命題がみいだされる。その命題は、「物質と量とが実在的には同一であるということは、ありえないことではけっしてない」と述べている。
	2		6 -- In der 7 That sind diese Begriffe auch nicht weiter verschieden, 8 als darin, daß die Quantität die reine Denkbestimmung, 9 die Materie aber dieselbe in äusserlicher Existenz ist.	――実際、これらの概念は、次の命題とほとんど異なるものではない。すなわち、《量は純粋な思考規定であるが、質料は外面的な現実存在での思考規定である》という命題である。	実際にこれら〔二つの〕概念は、量は純粋な思考規定であり、物質は外的現実存在における同一のものである、という点でちがっている以上にはちがっていない。
	3		9 -- 10 Auch <i>Ich</i> kommt die Bestimmung der reinen Quantität 11 zu, als es ein absolutes Anderswerden, eine unendliche 12 Entfernung oder allseitige Repulsion zur negativen Frey- 13 heit des Fürsichseyns ist, aber welche schlechthin einfache	――〈わたし〉にも、純粋な量の規定が帰属する。すなわち、〈わたし〉は、絶対的に〈他になること〉であり、無限に〈遠ざかること〉であって、詳しくいえば、〈それだけで独立した存在〉という否定的な自由に対して全面的に反発するこ	――自我にも純粋量の規定が帰属する。それは、自我は絶対的な他になる運動であり、向自存在の否定的自由にもむかって無限に遠ざかること・またはこの自由への全面的反撥であるが、しかしこの遠ざかることないしは反撥は端的に単一の連続性

² Vgl. *PhB.*, Bd. 375, S. 295. Vgl. „VII. Propositiones ex disputatione metaphysica de principio individui, quam præside Jacobo Thomasio, publice proponit Gotter. Guil. Leibnitius. Lips. 30 Maii 1663.“ In : Gothofredi Guillelmi Leibnitii ..., *Opera Omnia* ..., studio Ludovici Dutens. T. 2, Genevæ 1768 (Google), S. 400. これが „Pars I.“ の末尾。この直後が „Pars II.“ Vgl. *Ausführlicher Entwurff einer vollständigen Historie der Leibnitzischen Philosophie zum Gebrauch einer Zuhörer*, hrsg. v. Carl Günther Ludovici, Lipeis 1731. §. 21, S. 37 f.

ヘーゲル『論理学』初版（1812 年）396 段落～400 段落

			14 Continuität bleibt.	とであるが、しかし、こうした反発が端的に単純な連続態のままにとどまっている、ということである。	でありつづけるのだからである。
	4		14 -- Welche sich dagegen sträuben, 15 die <i>Vielheit als einfache Einheit</i> zu fassen, 16 und ausser dem Begriffe, daß von den Vielen jedes das- 17 selbe ist, was das Andere, nemlich eins der Vielen, -- 18 indem nemlich hier nicht von weiter bestimmtem Vielem, 19 von Grünem, Rothem u. s. f. sondern von dem Vielen 20 an-und-für-sich betrachtet, die Rede ist, -- auch eine 21 Vorstellung von dieser Einheit verlangen, die finden der- 22 gleichen hinlänglich an jenen Stätigkeiten, deren einfache 23 Anschauung unmittelbar den deducirten Begriff der 24 Quantität gibt.	——【多態は単純な統一だ】ととらえることに抵抗して、《〈多〉についてはそれぞれが〈他のもの〉と同一であり、すなわち〈多〉が一つである》——なぜなら、すなわちここでは、〈緑〉や〈赤〉などといったさらに規定された〈多〉が話題になっているのではなくて、〈多〉がそれ自体でもそれだけで独立しても考察されて話題となっているからである——という概念以外にこの統一の表象をも求めようとする者がいる。こうした者たちは、そうした表象を先述した〈たえざること〉で十分に見出している。その表象を単純に直観することは、量という演繹された概念を直接的に与えるものである。	——多を単一な統一として把握することに反対する人びと、また、多くのもののうちのおのおのは、他のものすなわち多くのもののうちの〔任意の〕一つがあるところのものと同一であるという概念——というのは、ここで問題になっているのは、緑色のもの・赤いもの等々といったようなよりたちいて規定された多くのものではなくて、絶かつ究極的に考察された多くのものであるから、——こういう概念のほかにこの統一の表象をも要求する人びとは、前述のもろもろの連続体〔空間、時間、物質等々〕のもとにそういったもの〔統一の表象〕を十分にみいだすのであって、これらの連続体の単一な直観はさきに演繹された量の概念を直接に与えてくれているのである。